

# カーディフで頑張っちゃいました！

経営学部 大崎 孝徳

二〇一三年七月、ウェールズ的首都、カーディフで開催された Academy of Marketing 2013 に参加した。Academy of Marketing は欧州を中心とするマーケティングの国際学会である。以下、学芸で感じたことなど、諸々を綴ってみた。

## ・バタバタの出発前夜

発表準備に追いつままれていた出発前夜、研究室で疲れ果て、少し仮眠を！と寝込んだところ、ゼミ長に襲撃された。研究に関する質問であり（感心である）、本来なら、もちろん時間も忘れ、懇切丁寧に指導するところであるが、出発は明日の早朝である。しかも全く発表準備が整っていない。おまけに旅の身支度すらできていない。かといって無下に追い返す訳には当然いかない。ということで電気もつけず、暗い研究室で横になっただまま、必要最小限の指導にとどめた（もちろん帰国後、しっかりフォローしております）&（あと男子学生ですので、念のため）。人間ができていないゼミ長は帰り際、「おやすみなさい」

と優しく声を掛けてくれた。

その後、「よし後三〇分寝たら、がんばろう！」と再び目を閉じた途端、今度はゼミのX君がやってきた（涙である）。ゼミ生は私が明日から出張であることを知っており、捕まえられるうちに、ということをやってきていたのであった。

手前味噌ながら、我がゼミ生の研究へのモチベーションは半端なく高い。その理由は明白で、他大学との研究プレゼンコンテスト（名古屋マーケティングインカレ）に参加しているからである。毎年、六月と一〇月に中間報告会があり、一二月に最終発表会が開催される。よくビジネスの世界で競争の効用のようなことが議論されるが（もちろん弊害もあるものの）、これは学生にも見事にあてはまる。普段はほんやりしている印象が強い学生たちであるが、インカレの場は激しい議論のやりあいとなり、殺気に満ちていると言っても過言ではない。「自分たちは負けたくない！」そんな空気が充滿している（私は完全にひきまわっています）&（賛否両論あるでしょうが、全力で戦う姿は私には本当に美しい光景に見えます）。

話は戻り、X君の学術的質問は早々に終わつたものの、彼の雑談に花が咲いてしまい、その後一時間を要してしまった。で、結局、夜中三時、十分な準備もできないまま、「もうあかん！」と研究室を出て、普段はめつたに使わないタクシーに飛び乗り、家に帰り、風呂に入り、パッキングして、五時半にセントレアに向け、出発！

「あーいややな、絶対なんか忘れてるわ」と自らの段取りの悪さをゼミ生のせいにしつつ……

## ・ドイツ（フランクフルト）着

欧州を訪問する機会はそれほど多くないため、トランジットの地点であるフランクフルトに少し滞在し、自分の研究テーマである高付加価値商品を扱うメーカーやリテラーへのフィールドワークを行った。

普段なら昼の調査が終われば、夜はおいしい異国の酒！となるところであるが、今回はカーディフでの発表準備ができていない。また都合よく時差ボケにより、夜は早々に眠たくなり、朝は五時に目が覚める事態となったため、早朝に発表準備を行った。ホテルは禁煙であったため（欧米は大概そうであるが）、喫煙者の私はホテルの前の植え込みの端っこに座り込み、準備することになってしまった。

そもそも今回、発表準備が難航している理由は話すべき内容が上手く頭に定着しないためである。なぜなら今までやったことのない量的アプローチによる研究を発表するため、なじみのない専門用語がうまく整理できない。また日本でもしたことがない一日に二本の研究発表を行うという事態となったため、まさに「二兎追うものは一兎をも得ず」状態となり、全く集中できなくなってしまうていた。原稿のようなモノを作成し、発表の場で読もうかと何度も頭によぎったが、普段から学生に「読むような発表は最低だ！」と指導している手前、どうしても避けたい。などなど、いろんな葛藤の中、準備や発表練習をドイツでもたつぷり続ける羽目になってしまった。

ドイツも昼間は暑いものの（湿気がない分、気持ちいいです

が）、朝はかなり寒かった。そのせいであると思われるが、何と二日目には風邪をひいたようで咳込むようになってしまった。幸い発表前日には随分と良くなったものの、自分の年齢などを考え、まともな行動をしなければとほんの少し反省した。

## ・ドイツで感じたこと、少々

写真をご覧いただきたい。いかがだろう、このホットドック？ まず、やけくそではないか？ と思ってしまうくらい大きなソーセージ！ あと食べてみると、鮮度の良さを強く感じた（日持ちはあまりしないでしょう）。で、価格も安い！ なら消費者としては最高ではあるが、実際三ユーロ（四〇〇円）だった。日本では牛丼が二八〇円、ホットドッグなら一五〇―二〇〇円程度であろう。私の主食とも言えるアメリカカンドッグならコンビニで一〇〇円で済む。よって一言でいえば高価格となるだろう。しかしながら日本のモノとの違いは一目瞭然である。確かに低価格は多くの消費者にとって、大きな魅力ではあるが、過度の低価格により企業が適正な利益を得ることができなければ社会にとっても大きなダメージとなる。そう考えると、ドイツをはじめ欧米の物価は高いと言えば高いが、本当はこのあたりが適正なかもしれない（社会全体にとって最適）とも感じてしまった。

でも、よくよく考えれば日本には昔から「一生もの」という言葉もあり、安くて、いいもの、一辺倒ではなく、高くても、本当にいいものをという価値観が強く根付いているはずだが、



驚異のホットドッグ！

最近めっきり影を潜めてしまっているように思われる。こうした事態については不景気のせいだとの意見が支配的だが、日本の不景気なんて多くの欧州諸国に比べれば天国のような状態であるはずなのに……

また今回のドイツ滞在は日曜日を挟むことになってしまったのだが、一部の飲食店を除けば見事に軒並み閉店であった。街全体が静まり返り、おそらくみんな家でくつろいだり、教会に行ったりしているのだろう。日曜日はおろか正月でさえ、もはや閉店している店が珍しくなくなった日本とは大違いである。一週間七日のうち一日くらい閉店しても何ら問題ないではないかと改めてしみじみ感じた次第である。

先に学生のモチベーションを高める競争の効用について述べたが、行き過ぎた競争の悲劇のようなものを自分でも真剣に考えないといけないのかもしれない。

#### ・ ロンドン（ヒースロー）着

フランクフルトからロンドン・ヒースロー空港（世界一荷物がなくなくなること有名）に到着。以前、恐ろしく通関に時間がかかったという嫌な記憶が残るヒースローではあるものの、今回は全く待ち時間などなくスムーズに通過。ここからカーディフまで二時間のバス旅となる。ドイツのホットドッグではないが、バスの座席は贅沢すぎるほど、ゆったりしている。もちろん日本人より体格が大きいためということもあるが、それ以上に長距離をバスで移動する人に対する気遣いのようなことが

大きく影響しているように思われる。そしてその分はしっかりと金額に上乘せされている（やはり、このスタイルが正しいのではないか?）。ヒースローを出てカーディフに到着するまで、バスの車窓はずーっとオールグリーン。つまり畑や牧草地以外、何も無い。という感じで快適そのものの移動であった。

### ・カーディフ着

カーディフに到着。早速ホテルにチェックインする。ホテルはかなり金額を抑え、予約することができた。しかもホームページの写真を見る限り、非常に立派なホテルであった。で、ルンルン気分であったかと言えば、そうではなく実は心配していた。なぜなら昔、同じく学会発表のためギリシャに泊ったことがあるのだが、今回のようにいいホテルを安く予約し、いざチェックインすると何とそこは大きな客室に付随した狭いキッズルームであった（本当はキッズルームかどうか定かではないものの、壁に大きくスーパーマンのペイントがあつたので間違いないと思っています）。という苦い思い出が一抹の不安となっていたが、しっかりとした一人前の部屋であり、その後も快適に過ごせた。

チェックイン直後、早速街に出てみた。コンパクトシティ！という言葉がまさにふさわしいダウンタウンであった。規模は大きくないものの、綺麗に整備された遊歩道を中心に大型ショッピングモールと小さな商店が共存していた。またその中心には図書館も立地していた。写真の通り、非常に洗練された



お洒落すぎる図書館



ダウンタウンと真ん中のお城

デザインで中に入るまで完全に商業施設だと勘違いしていた。さらに商業地区と隣接し、お城に併設する広大な公園など、日本からわざわざ訪れる観光地としてはやや物足りないかもしれないが、暮らしてみたい! と強く思わせる街であった。その後、二本のうち一本を共同報告する鳥居先生と合流し、ホテル前のパブで明日からの学会に備え、軽く一杯となった(いやあ英国パブの名を汚すのではないかとと思われるほど、ぬるく気が抜けたビールでした)。

・ いざ学会へ… 始まりはピアノだった

学会は University of South Wales で開催された。つい最近、合併により名前が変わったようだが、音楽など芸術関係も盛んな総合大学であり、お城の公園に併設という最高の環境に立地していた。

学会は通常、私のような名もなき研究者ではなく、いわゆる大御所による基調講演から始まる。今回はカナダから来られた研究者の講演であった。中味はともかく、驚いたのは講演がピアノの演奏から始まったことだ。正直、会場を見る限り、「あれ? これちよつと滑ってるんじゃないかな?」と思わなくもなかったが、とにかく聴衆を楽しませようとする欧米人のこうした姿勢を我々、東洋人は常に見習うべきだと私は思っている。基調講演後は各セッションに分かれ、自分の領域に近い専門分野の研究者の発表を頑張って聞き漁った(何たって英語ですから、いやあ疲労困憊です)。そういえば一人の研究者は事前

にしつかりと準備したのであろうカードを手元に用意し、それを読みながら発表を行っていたが、やはり何とも言えない雰囲気がかたがたしていた。彼は少なくとも私なんかよりは数段、英語が上手なのに勿体ないなあと……&手には何も持たず、発表することに踏みとどまって本当に良かったと感じた（おかげさまで、この頃には準備も概ね落ち着いていました）。

あと通常、国際学会に参加すると、一人ぼっちでかなり寂しい思いをするのだが、今回は共同発表者の鳥居先生に加え、日本から来ていた別の大学の研究者、さらに英国の大学で教授する日本人の研究者との四人でセッションの合間やパーティーなどの時を過ごすことができ、幸せだった。二人とも女性であったが、あまりのパワフルさに鳥居先生ともども、恐れおののいていた。

また英国で教授する日本人の先生とは実は同時期に英国にいたことが分かった。私はマスター（修士号）を英国で取得しているのだが、彼女のマスターとタイミングが同じであったのだ。私はその後、日本に戻り、彼女は残って英国の博士課程に進学し、現在に至っている訳である。あの時、自分にも英国で頑張りが続ける根性があれば（+もちろんお金も）彼女のようになれたのかもしれない。当時の辛かった日々や、その他、諸々を思い出し、感慨深かった。



学会会場（University of South Wales）



University of South Wales の裏側（広大な公園に隣接）



基調講演の風景



ミニ懇親会：美術館でお酒を飲みながら（自分には大いに無理がありました）

## ・二日目：いよいよの時

とうとう発表する日がやってきてしまった。午前と午後に一本ずつである。

思い起こせば、初めてこの学会に参加したのは約一〇年前のアイerlandでの大会であり、これが私にとって初めての国際学会であった。本当に軽い気持ちで欧米の研究者の発表を聞いてみたいと参加し、自ら発表するなんて想像すらしていなかった。当時は今と比べるとアジア人の参加者は少なく、かわいそうに思ったのだろうか、見知らぬ白人で初老の先生が話しかけてきてくれた。「私はダブリン・シテイ大学で教鞭を執っているのだが、シテイ大学という名前なのにすごく田舎にあるんだ」という強烈な欧米ギャグから始まり、この学会のこと、アイerlandのことなど、いろいろと楽しく話していただいた。その後、彼から「君の発表はいつ、どの部屋？」と質問された。「今回は発表を聞きに来ています」と答えると、「What? You missed a chance.」(なんで！ そんなの勿体ないじゃん。せっかくの機会を逃しているぞー)と言われたことを今でも鮮明に覚えていて。ここにバカにするとか、蔑むとか、そういう感情は全くなく、ただただアジアから来た若い研究者に親身になって助言してくれていることが何よりもうれしく、また本自分が参加したい学会にはまず発表の申し込みだけはするというスタイルを取っている（実際、発表するためには審査をパスしなければならず、今の私にはなかなか厳しいものがあります）。





カーディフで奮闘する筆者（完全にテンパっております）

今回二本も発表することになったのも、実は昨年、審査をパスできず、「ならば今年は二本出せばどちらかはひっかかるのではないか?」と考えて応募したところ、二本とも通ってしまい、本当に大変な目にあってしまった訳である。

話を当日の発表に戻すと（その中味を書いても全く面白くないと思いますので、そこはカットするとして）、おかげさまで大きな問題なく、無事終えることができた（逆に、正直、全く盛り上がることもなく終わったとも言えます。まだまだ精進が足りず……）。質問やコメントも頂戴して有難かった。ちなみに日本では質問に際し、「○○大学の○○です」と名乗らねばならないが、欧米では「そんなの時間の無駄だ!」「研究に対する質問に何の関係がある?」と言わんばかりにすつとばし、みんなフランクに質問が飛び交う。普段の生活において、もちろん礼儀止しさは大事なことであるが、こういう場における極度の堅苦しさはクリエイティブティの創造に大きな足かせになるのではないかと改めて感じた。

この日の夜のビールは最高だった。北島選手の言葉を借りれば間違いなく「超・気持ちいい」夜だった。

・ いざ、ポストンへ!

自分の発表を完全に棚に上げてだが、今回の学会ではいろんなセッションに参加し、多くの研究者の発表を聞いたものの、あまり大きな成果を上げることができなかった。もちろん自分の感度の低さも大きな原因であろう。

ということと急遽、思い切って八月初めにアメリカ・ボストンで開催されるマーケティングにおいて最も権威のあるA M A (American Marketing Association)の大会に初めて参加することにした。八月半ばからは学生を連れ、シアトルに行かねばならず、かなり無理した強行スケジュールとなってしまうが決断した。理由は簡単で焦っているのだ。年齢的にはこれからという時であろうにもかかわらず、ここ数年、めっきり研究マインドが落ち込んできている。僅かばかりの灯が完全に消えてしまいそうと怖いのだ。自己分析すると、自分の場合一度消えてしまうと二度と灯らないという悲しい確固たる自信がある。当然のことながらこれは自分にとって大問題であり、一年でも長く研究マインドを持続させたい。私の定義では研究することⅡもがき苦しむことであるが、何とかもがき苦しむ姿を学生に見せ続けたい。そうすれば言葉では表現できない大事なことが伝わるはずだと信じている(プロ野球選手の「自分の現役時代の姿を子供にずっと覚えておいてほしい」という感覚に似ているかもしれない)。

本当は他人の目など全く気にせず、自分が価値あると信じたテーマを誠実に突き詰めるという健全な覚悟で物事に挑めれば、それが研究者として王道であろう。しかしながら根っからの怠け者で己に甘い自分にそんな崇高なことはとてもできそうにない。自分が研究を続けられる唯一の道は少しでも学会や企業や社会などから求められるような(貢献できるような)成果を出すことだろう。そうすれば求めてもらえるなら頑張ります、頑張ればいい成果が出るといふサイクルが回り出すと思う。

そういう日がやって来るのを信じて、今回のような国際学会での発表、他の研究者との共同研究、新しい研究方法への挑戦などをカンフル剤として活用し、今しばし粘ってみたい。

終わり